

報恩講について

宗祖親鸞聖人は、一二六二(弘長二)年十一月二十八日に、九十歳のご生涯を終えられました。親鸞聖人をはじめ、お念仏の教えに生きられた先達に思いをいたし、その恩徳に感謝し報いる法要が報恩講です。お念仏の教えを聴聞し、自らの生活を振り返る、一年でもっとも大切な御仏事として、全国各地の寺院・教会をはじめ、ご門徒の家々においても勤められており、「お取越」や「お引上」の名でも親しまれています。「お取越」とは、ご門徒の家々における報恩講の別称です。親鸞聖人の御命日が巡ってくる前に取り越して勤めることからそう呼ばれており、「お引上」も同様の意味です。

報恩講は、人々が寄り合い、お齋をいただくなど、共にふれ合いつつ聞法する場として、今日まで脈々と勤められているのです。

私と報恩講

—おいしい伝統とともに—



平 いづみ

東北教区秋田県西組
西善寺衆徒



お彼岸も過ぎ、境内を通り抜ける風が冷たくなった頃、秋田県の自坊・西善寺では、報恩講が勤まります。

私がお寺に嫁いで初めての報恩講、そのときに驚いたのはお齋でした。報恩講の三日前、倉庫から薪ストーブを出し、軒下に据えました。重い大鍋をストーブの上に置き、大量の大根の皮をむき、輪切りにしてから鍋の中に浸し、薪を入れて炊き始めました。一日で終わると思いきや、驚くことに三日間も煮込み続けたのです。お齋の一品「煮大根」でした。西

善寺の報恩講の伝統料理です。

嫁いできた当初は、準備をほどほどに手伝うくらいで、「三日も煮込むのはたいへん」という気持ちでした。昔からの伝統というものになかなかなじめず、報恩講に素直に向き合うことのできない私がいきました。

右も左もわからない私は、先輩方にひとつひとつ教えてもらいます。「大丈夫。だんだん上手になるよ」と励ましてもらいながら、毎年くり返す報恩講に少しずつ慣れてきた矢先、新型コロナウイルス感染症がやってきました。法要は短く勤められ、お斎は中止。人とのふれあいが制限され、三年間は昔からの仏事はすべて簡素化され、様変わりしました。

ようやくコロナも五類になった昨年の夏の終わり頃です。坊守と副住職が「今年の報恩講、お斎はどうしようか」と相談していました。中止して三年が経っています。三日間煮込む大根や、何品もの料理を作ることがない報恩講は、確かに楽でした。そして一度やめたも

のをまた始めるということとは、なかなか覚悟のいることです。

すると、遠くでその話を聞いていた住職が「お斎、ここで始めなければ終わってしまう」と一言。これがお斎再開の合図となりました。

三年ぶりに出した大鍋でコトコト煮る大根。その香りに包まれながら、手伝いに来てくださったご門徒もんたさんたちと一緒に賑やかにお斎の準備をする時間は楽しく、気づかないうちに夢中になっている私がいきました。

そして迎えた報恩講。ご門徒の皆さん、お寺さん、ご法話の先生も一緒に、輪になってお膳を囲みます。真ん中には、つぼ椀からあふれんばかりにずっしりした厚みの「煮大根」。じっくり煮込んだ大根はつややかな餡色で、芯まで味がしみ込んでいます。「おいしい」の言葉が飛び交う、楽しく和やかなお斎のひとつとき。「こうしてみんなで手を合わせて、またこの大根を食べることができてよかったです」。この言葉を聞いたとき、「お斎、再開してよ

かった」と思いました。

一年に一度、親鸞聖人のご命日をご縁として、お念仏の教えを確かめていく仏事が報恩講です。そのお念仏の中で生きてきた住職の「お斎、ここで始めなければ終わってしまう」という言葉は、お斎の場もまた、お念仏が伝わっていく大切な一つの間であり、おいしくご飯をいただきながら、人と人とが顔を合わせて語り合う大切な報恩講の一部であるということを私に教えてくれました。そして、報恩講のお参りを喜ぶご門徒さんの言葉は、親鸞聖人のもとに集い、お念仏の教えを大切に受け継いできたからこそそのものです。お斎の再開をおし、ご門徒の皆さんのうれしそうな笑顔を目の当たりにして、報恩講を単なる慣例行事のように感じていた私のところにもお念仏が届いていたことを実感しました。お念仏の伝統がここに受け継がれているということに気づかされた、大切な報恩講になりました。

報恩とは!?



べつき こうしょう
戸次 公正

大阪教区第22組
南浜寺住職



報恩講という「法事」

親鸞さまの「法事」をおつとめするのが報恩講です。それは、本願の世界に邂逅した人である親鸞さまの生涯と教えを追憶する集いです。

「法事」について、浄土真宗の儀式の源流を訪ねると、善導大師が著した『法事讃』にさかのぼります。そこでは、「法事」とは「讃嘆と懺悔」の場であると説かれます。